

「子の親になる前に親の子になれ」の言葉は、「子供を育てる立場となる前に、自分が親の子供に成り切ることが先である」という意味です。これは、社員を育てる経営者の姿勢をも示します。今号は、親と向き合ったことで、会社の経営が好転していった経営者の体験をご紹介します。

人が初めて「感謝」という念を覚える対象は親でしょう。なぜならば、自分の命を生み育んでくれた人だからです。であるからこそ、親に対して抱く感情は、他者とのあらゆる場面でのかわり方に影響するのかもしれない。

T氏は、創業した飲食関係の店舗を国内・海外に広げています。現在、経営は好調ですが、創業当時は客足が伸びず、社員の定着率も低い、苦境の時期がありました。そのような時、倫理法人会に入会し、生活を営む上での指針となる『万人幸福の葉』に出会い、以下の文に触れて転機を迎えたのです。【最も大切な、わが命の根元(もと)は、両親である。この事に思い至れば、親を尊敬し、大切にし、日夜孝養をつくすのは、親がえらいからではない、強いからではない。世の中にただ一人の私の親であるからである】

T氏は幼少期に両親の離婚を経験しました。母親が家を出て一カ月が過ぎた頃、家の電話が鳴り受話器を取ると、母親の声が聞こえてきました。「○○ちゃん、寂しくない?」と聞かれ、即座に「うん、寂しくないよ」と答えたのです。この時から、T氏は心に殻を幾重にも重ねていきました。高校時代の恩師には「あいつは性格が悪いから」と言わ



6月のテーマ | 感謝という妙薬

親の子になる

れ、起業前に勤めていた会社を退職する際、送別会の席では「この会社には、自分を使いこなせる上司がいらないから退職します」と挨拶をしました。母親との電話以降、自分の本心に蓋をし続けてきたのです。その後、創業するものの業績は一向に上昇しませんでした。

〈自分は親を恨み続けてきた。しかし『葉』には、命の根元を大切にしよう」と書いてある。どんな境遇であろうと、自分を生んでくれた事実一点のみにも、親を敬する意味があるんだ」と学んだT氏は、母親の住所を探し当て、花を持って感謝の気持ちを伝えるに行きました。また、疎遠になっていた父と育ての母の誕生日を祝い、素直に向き合うことで、真の意味で三人の親の子となっていたのです。

この後、店を任せられる三人の社員との出会いや雑誌の取材が無い込み、会社の経営状況が変わっていきました。会社の経営をする上では、どのような業種でも人とのかわりが求められます。従業員、お客様、取引先など、人間関係を外した仕事はありません。人との接点を良好に築いていくためには、「感謝」という心を持つことでしょう。その心を育てる妙薬を精製するには、自分の命のもとである両親と向き合うことから始まるのです。

T氏は以降、定期的に生みの母のもとを訪れ、従妹からは「いい親子ね」と言われる関係を築いています。そして、これから先は、受けた恩に報いる時期と決心しています。今日もT氏は倫理法人会で、次世代を担う経営者たちに、「感謝」を軸とする倫理経営を伝える役に徹しています。